総務文教委員会会議録

１．開催年月日

平成３０年１１月１３日　　開会　１２時５７分　　閉会　１５時１５分

２．開催場所

委員会室

３．出席委員名

西　村　慎次郎　　宮　地　俊　則　　妹　尾　文　彦　　山　下　憲　雄

西　田　久　志　　三　輪　順　治　　佐　藤　　豊

４．欠席委員名

なし

５．その他の会議出席者

（１）事務局職員　　事務局次長　藤　原　靖　和　　主査　柳　本　兼　志

６．傍聴者

なし

７．発言の概要

委員長（西村慎次郎君）　　皆さんこんにちは。

少し早いようですが、ただいまから総務文教委員会を開会いたします。

〈議長あいさつ〉

委員長（西村慎次郎君）　　本日の議題は、１、行政視察報告についてから３、その他でございます。

〈行政視察報告について〉

〈行政視察報告書の概要について、別紙のとおり決定〉

〈行政視察における各委員の意見・感想を発表、今後の取り組み等について協議〉

〈所管事務調査〉

委員長（西村慎次郎君）　　次に、２、所管事務調査事項、井原市の教育環境のあり方についてを議題といたします。

さきの委員会において、これまで調査してきた中で、課題とその解決の方向性について、委員会としてまとめるよう進めてきましたが、西条市の行政視察後に協議すると決定していました。

つきましては、西条市の行政視察を踏まえて、皆さんの課題やその解決の方向性についてご意見をまとめていきたいと思います。委員の方より意見をお願いいたします。前回のときに、皆さんから課題と解決方向性ということで出していただいて、一覧でお配りしてると思います。視察を踏まえて、これに追加がありましたら、横の資料です。追加があればお願いしたいということです。

委員（三輪順治君）　　よくものを例えるのに、ヒト・モノ・カネ・情報といいます。教育委員会のＩＣＴ化についても、ヒト・モノ・カネ・情報という切り口から考えると、ヒトについては教員の問題、かなりの分野で皆さん触れられてますけど、教員のＩＣＴ化に対応する研修制度や、あるいは組織体制どうするかという問題が一つ大きく出てます。人の問題、これからもそうだけど、人が人を当然教えていくわけです、教育ですから。機械が教えるわけでないので、その問題がもうずっとネック、人の問題、ちょっと大きい切り口で、それからモノはそりゃデジタル化です。デジタル化を進めていく。副委員長も書いとったように、アナログの大切さもあるんで、ちょっと併用になりますけれど、アナログ、要するに辞書の活用とか、あと会話とか、直接会って、それも大切、あとアシスタントの問題、校務支援アシスタント、それからあとＩＣＴ支援員、それから地元メーカーが井原市内にはソフトメーカーが実は現にいないんで、多分井原市役所のＯＡの母体が富士通じゃと思う。やっぱり富士通は岡山市内にあるし、ある程度息の長いつき合いをせにゃいけんので、そういう環境整備ということで、ソフトは常に変わってきますから、ＡＩという機能も含んでますから、そういうものを入れていく。あと情報も、あとカネの部分は、ちょっとこの委員会じゃなじまないというか、おかしい、ちょっと合わんので、金だけ議論したらあかんので、有利な起債であるとか、あるいは補助を使っていけばいいんですけれど、どうしてもこのときにさっき言った統廃合が問題、ひっかかってくるけど、ちょっと置いてえて、ヒト、それからモノ、情報というような切り口で、ちょっと大きく分けりゃあ、もう大体今まで議論にはまっとるようなものが当てはめりゃはまるんじゃけど、この委員会でじゃあ取捨選択でどこをメーン

に生かして全協に提案し、市長に提言するかという話をしていけば、私は今までの議論で相当潰れてると思います、議論を、この半年ぐらいで。

委員（山下憲雄君）　　前回プラス西条市の神戸小学校を見て、ちょっと今思いますに、井原市が地元愛とか郷土愛とかといって、そういう子を育てたいと言っています。その視点がここに漏れてるような気がするんです。地元に帰りたくなるようなというような話を井原市にありたいといったようなことを前市長も現市長も言っています。そういう教育をするにはどうしたらええかというそのテーマが一つ要るんじゃないかなと思うんです。僕は、自分を振り返ったらいかんですけども、私たちは学校へ行くときに魚屋さんを通って、床屋さんを通って、肉屋さんを通って、八百屋さんを通ってみたいなんして、ずうっとそれを大人の働く場というのを生で見ながら大きくなってきてます。ところが、今は大人が働く現場というのを見る機会が全くない子供たちが、ましてＩＣＴでこうやっていくと、ますますそうなっていくような気がしますので、地元の大人、一生懸命働く大人たちと触れ合うような教育環境、教育の場というか、そういう話し合いをするというか、そこへ例えば井原の夏祭りとかといって、それを大人が企画したものに子供が入り込んでいくようなとこがあったり、大人が仕掛けた文化祭を子供たちがそこへ参加するみたいなのがあったりしますけども、例えばまちづくり、パートナーシップ・プロジェクト云々というようなことを今やってますけども、そのメンバーに中学生を何人か入れるように推奨して編成を要請するとか、高校生も含めて、小学生は小学生でまた立場があると思うんです。そういったような教育環境というのか、そういうことをしていかないと、小さいころに仕組まれた大人との接点とか思い出とかがないと、僕は帰られないと思うんです。帰るような気にならない、出ていってしまっている者にしたら。だから、大人も小さいころから大きくなっていったら、ちょっと話がそれますけども、英語留学してどこかオーストラリアに行ったとか、カナダに留学するとかといって補助金を出したりしますけども、そういう人たちは井原市として何を学んできてほしいかというテーマを持っていって帰ってくる。帰ってきたら、どうでしたかというようなことをちょっと皆さんに自分の学校だけじゃなくて、ちょっと大人たちにも報告の場を持たせてもらうとか、知りませんよ、そういったような何かをしていかないと、せっかく助成を受けて勉強してきたけど、そういう人はグローバルになって外へ出ていってしまうわけです。だから、帰ってくる仕掛けというのは、ちょっと例えが思いつきませんけども、何かあったほうがいいんじゃないかなと。

委員（三輪順治君）　　関連して、原風景というか、ふるさとの源泉は小学校、中学校、高等学校で多分サケの帰巣本能じゃないけど、多分出てくるんです。そのときに大切なのは、おっしゃったように昔だったらそういう光景がありましたが、今はない。何が残るかというたら、今多分各地でやられてます地域の方々との交流、だから技術とか生きざまとかという

のを学校で披瀝されてますよね、学区単位でそれぞれの著名の方が。僕は、こういう手段とか、あとは文化、伝統芸能というのを伝えることによって、これは教育環境というよりか、文化環境といいますか、ちょっと広くなるけれども、それは当然今でも取り組まれていますし、ますます取り組みが必要になってくる時代になるというようなことで、大切な視点だと思います。だから、確かに表立ってここにおける帰巣環境というのはありませんが、それはじゃったら中高年で帰れるかという話にもひっかかってきて、ちょっと教育から離れてくるんで言いにきいですけど、できるだけ教育環境の中に、おっしゃったようにこの井原の地に帰ってこれるようなにおいづけというのを、なすくりつけというのをしとかにゃいけんというのは……。

委員（山下憲雄君）　　すり込み。

委員（三輪順治君）　　そういうことです、すり込みを。それは、いろんな人が、僕は今環境が違いますから、現在取り組まれてるものをより強化することによってそれができるというふうに私は思いますし、また言うちゃあ怒られますけど、井原放送の活用なんです。また、これ教科書がないから、全く見てない世界だから、井原のＣＡＴＶの活用。

委員長（西村慎次郎君）　　今、三輪委員が言われてるように、郷土愛の醸成につながるような教育というのは今でも取り組まれているのかなあとは思ってます。この間、夏休みの終わりごろにふるさと自慢というて各学校が発表会を市内でやったりしてて、ああいうことの取り組みはされてるっていう、さらにっていうとこも当然ありかなあとは思っているんだけど、なかなか私が教育現場の人と話をすると、今度学習指導要領が変わる中で、英語の時間が３５からもう７０時間にふえていくっていう、なかなかそういう総合学習の時間というのがとりにくくなってるっていう現実もあって、ちょっと地域との連携を今高屋小学校なんかは餅づくりというか、米づくりというて田植えからずうっと稲刈りまでやって餅つきまでしてっていう一連の作業を全部小学生に体験さしょんですけど、もうそこをちょっと省かないと授業数の確保はできんなあという動きもあるという、一方ではそういう動きもあるんです。地域との触れ合いというのは当然我々のころから比べると、随分多い、総合学習の、とは感じてるとこであって、さらにというところが学校の中に取り込むというのがどこまでできるかという、普通の地域行事に子供を呼んでくるというのは、それは休みのときでいいんですけど。

委員（山下憲雄君）　　それで、その話でなぜ私がそういうことを思うかといったら、そういう地元に帰りたくなるような子供たちはどういう地元で育つかということやと思うんです、言うならば。だから、地元はどうあるべきかというこの視点が大人の世界だと思うんです。ここを子供たちにどう見せるかというのが学校教育だけじゃなくて、教育環境ですね、広く町というものも、家族という家庭は幾らか出てきましたけども、この町の部分がどうい

う町だったら帰りたくなるのかという部分を子供たちの視点に当てないといけないんじゃないかなということで、ちょっとまだ整理できてませんけど、そういうことです。要するに、そういう子供はどういう町で育つかということを考えたら、そうせんといかんと思います。

委員（三輪順治君）　教育環境の整備の中で、今美星と芳井のデジタル化の話が出てますね、井原市において。今は、電柱までは光ファイバーが来とるけども、電柱から家には同軸が入ってる。これを変えていきたいという話をちょっとやられとったんです。事業主体はどっちかというて聞いたら、今検討中じゃというて、違う。井原市がやりゃあいいんです。井原市がせんと、井原放送に全部お金を支払わせたら、これもう潰れるというか、厳しいですよ、過疎地域に。これは、行政が先頭を切ってやる。それは何かといやあ、うったては教育環境のデジタル・ディバイド、つまり格差の是正なんです。それは、市内がそうであるように光ファイバーが家まで行ってます。美星も芳井もちっちゃい、数は少なくなってるけど同じ環境をするのが僕たちの役割じゃ思う。そのときに、井原市が先頭を切ってやったほうが理屈も通るし、それは教育だけの問題じゃなくて、会社だって恐らく図面を送ったり、写真を送ったりするのに今のままじゃ多分できんと思う。だから、そういう意味であらゆる分野を捉えてやるということはちょっと置いといて、教育に限って教育環境の整備の中にネットワークの確立ということで、美星、芳井も書いていただけりゃ、この中に今ないから、今のままじゃないから、そりゃ結局何ぼデジタル教科書を置いたり、何やかんやしても、通信スピードがそこだけならええで。今度は学校と教師、教師が家でテレワーク、つまりワーク・ライフ・バランスをやるときに、美星におる人だけが恩典をこうむれない環境になり得る、家庭じゃったら。それは、井原市の責任でやっていくべきだろうというようなことを含めて、ちょっと今ここにない視点で教育環境の整備の中に光ファイバー、高速、超高速光ファイバー網の、それはビジネスにとっても僕はサテライトを含めてチャンスと思います。ごめんなさい、ちょっとそういうことをつけ加えてもらったらええかなと。そしたら、余り井原市がややこしゅう考えんと、井原市の事業として取り組めると。別に井原放送を応援するんじゃないんです。デジタル環境を格差をなくすということで、そんなことを思うて書かれんから、教育環境の整備ということでやると。

委員長（西村慎次郎君）　多分、学校間はデジタル・ディバイドは……。テレワークまでは今はないけど。

委員（三輪順治君）　いやいや、生徒と学校、教師が家庭とは……。

委員長（西村慎次郎君）　いやいや、じゃからテレワークとかの環境までいくと、多分……。

委員（三輪順治君）　いや、それはもう見据えとかにゃいけんと思う。

副委員長（宮地俊則君）　３億円は要るよな。

委員（三輪順治君）　　もう何億円要っても、そりゃ前でも１３億円かかっとんじゃけえ。そりゃ今井原放送にやらすのは酷、ごめんなさい、個人的な発言しちゃいけんけど、僕は教育環境の格差是正というのは課題じゃ思いますから、今課題、それ、解消に向けての方向性は、井原市内と同一のインフラ環境を整備を整えるという形で一筆起こせば、私は提言としてはできると思います。

委員長（西村慎次郎君）　　例えば、西条市のテレワークでいくと、ＶＤＩというて、画面イメージだけがパソコンに飛んできょうるんで、余り容量が多くないんです。だから、余りそのネットワークとして太い線が必要ではないという、画像とかビデオとか写真とかをダウンロードするわけじゃなくって、イメージで見ようるだけなくで、テレビ見ようるのと同じぐらいな回線速度というか、そんなに高速な回線が必要ではない環境を使われている。実際に、それをダウンロードしてパソコンでやろうとして作業が終わったら、もう一回アップロードするっていうような環境になると、当然今言われるようなことは必要なんでしょうけどとは思います。

委員（三輪順治君）　　これから、図形を扱ったり、大量のデータを使うことはいっぱい出てくるんです、ビジネスマンとして。だから、教育は数字の世界かもわからんけど、実は絵画表現、へえから写生というか書写、いっぱい分野的に容量を食うのがありますから、ぜひデジタル・ディバイドの解消という面で環境の整備で入れていただきたいというふうに思います。各論はまた後で議論すりゃあええですけど。

委員長（西村慎次郎君）　　そのほか何かほかに、今上げていただいてる以外でありますかといって、上げていただいた後、課題は何となく絞り込んで、最終的に提案する部分というのは何個かに絞って提案できたらなあと。全部いろんな視点でいっぱい上げ過ぎると、いっぱいになるんで、課題としてはたくさん上げてもらってもいいんですけど、その解決の方向性というのは重要課題に絞り込んで上げていければいいなあとは思ってます。

たたき台ということで、今お配りしている、うまく印刷ができてないとこもあるようなんですけど、バージョン０．３版ということで、２２ページへ皆さんに書いていただいた課題を私なりに集約して、何点か課題を上げています。その２２ページ、２３ページでその辺課題として上げてると。２４ページで、何となくこの辺が皆さんの意見の落としどころかなというような感じで上げてるんですが、この辺もまた追記してもいいですし、全然変えてもいいとは思ってるんですけど、まず２２ページの課題ということでいくと、最初の１としては児童数とか生徒数の減少ですよということを書いて、将来的には５年後には２００人以上の小学校は１つになって、１００人以下の学校がふえてくるというようなことを書いてます。

２つ目の課題として、教員の児童・生徒に向き合う時間の確保という課題がありますねということで、ここへ教員以外でもできるような業務がいろいろあるんですよというようなこ

とを書いてます。

３つ目として、ＩＣＴ支援員に対するニーズはふえてきてますよということで、今はＩＣＴ支援員は２名ということで、月１回の訪問ということで、国の基準でいくと、４校に１人というふうになってるんで、本市でいくと５人は必要じゃないかというような課題があるということを書いてます。

次の２３ページには、ＩＣＴ環境の学校間格差があるんじゃないかということで、例としてデジタル教科書の話を出してます。国語と算数については、全学校に入ってんだけど、それ以外については各学校で有効であろうという教科を購入されて独自で入れられているということで、学校間格差は出てるということで、あとここへつけ足すとすると、ＩＣＴ機器についても整備が整ってる、井原中学校を例にとると、井原中学校は特別教室全部と、電子黒板がそろってますけど、それと比較しちゃあいけないかもしれないんだけど、ＩＣＴ機器についても学校間格差が起こってるんじゃないかということをつけ足したいなと。

それから、５つ目がＩＣＴ人材づくりということで、ＩＣＴ機器の活用というのは今の時代欠かせないという状況で、活用能力によって授業の質とか事務の効率化に大きな差が生じると考えられるということを書いてます。

それから、６つ目が校務支援システムの改善ということで、小学校から中学校へのデータの引き継ぎがスムーズに連携できてないんではないかというようなアンケート調査とか訪問でも言われてたんで、そういう話、タイムカードなど現場の校務支援システムに対する改善ニーズというのは多くあるんだよということを書いてます。

７つ目がさらなる学習規律の徹底ということで、学習規律というのは徹底に関してはどこも取り組まれているんだけども、まだまだ十分とは言えないというのがアンケート結果とか訪問の先生方からのご意見としてあったということで、課題としては今７件上げています。

２４、２５ページにかけて、大きく３つに絞っての解決の方向性ということで、１つはＩＣＴ環境を充実ということと、そういう充実することで学校間格差というのを是正していこうという話、２つ目がＩＣＴ支援員体制ということで体制を充実してほしいということ、あと３つ目として教師業務アシスタントの全学校配置ということを書いています。３つ、４つ、５つぐらいで、余りたくさん上げ過ぎてもいけないのかなあというとこで、今は３つ上げさせてもらって、ＩＣＴに関するところを中心に上げております。

１つ目のＩＣＴについては、まずはＩＣＴ環境整備計画というのをしっかり整えて、それに従ってさらなるＩＣＴ環境の充実と学校間のＩＣＴ環境格差というのを解消に向けて環境整備を要望しますということで、児童・生徒一人一人へのパソコンもしくはタブレット端末の設置と、電子黒板、実物投映機の特別教室を含め全教室への配置、それから全教科のデジタル教科書を全学校、全学年へ整備、ＩＣＴ環境を安全に安心して使えるような教育情報セ

キュリティー対策、それと教職員への学力向上の推進につながるＩＣＴ活用研修ということで、具体的な説明はないですが、そういった箇条書きですが、書いてますと。

ＩＣＴ支援員体制の充実としては、教育の児童・生徒に向き合う時間の確保や教職員の負担軽減に向け、学校ＩＣＴ支援員を配置し、各学校からの要望等に即応し、課題解決を図るとともに教員ＩＣＴスキルアップへの支援体制を整えることを要望すると。また、教育委員会内に教育研究所という仮称ですけども、そういうのを設置して学校のＩＣＴ環境整備の研究や教職員のＩＣＴ活用レベル向上に向けた取り組み、また教職員からのＩＣＴ環境のＱアンドＡ対応を行う体制を整えることを要望するということを書いてます。

３つ目に、教師業務アシスタントの全学校配置ということで、教員の児童・生徒に向き合う時間の確保や教職員の負担軽減に向け、時間のとられる業務を少なくすることが必要であるという、そのために県へさらなる教師業務アシスタントの増員を求めていく必要があるが、県で全学校に配置できない場合は市独自で増員をしていただくことを要望するというような書きっぷりをしております。

こんな感じで、まとめのほうへ行っちゃってますけども、まだまだ多分これに書かれてる内容のほかにもたくさんあるんで、ぜひここはというのと、ここまでは必要ないんじゃないかとかというようなところがあれば、ご意見をいただきながら、ここを完成していきたいなあというふうに思っております。

副委員長（宮地俊則君）　６に課題、７に課題解決の方向性、これで言うと、どこに組み込めばいいのかわからんのですけど、この課題から出て解決する、その前段としてこちら皆さんあるように、市に予算づけしたりいろんな面で、あるいは機器の選定とか導入するとして、それから課題から見えて解決するんでも、今さっき言ってましたようにどこまでするか、一気にここまでというわけにいかない、順番に踏んでいくとか、予算面からもいろんな点があろうかと思うんです。まずは、ここにもあります教育研究所、今回視察した５日のほう、それから前のところもどこにも必ずありました。三輪委員のあれではＩＣＴ推進室、名前は何でもいいんですけれども、そういった議会には今言うプロジェクトチームをつくってますよね。そういうのを教育委員会にこれを進めていくたけた人たちの集団、プロジェクトチーム、名前はもう何でもいいんですけども、そういうものをぜひとも設置してリーダーシップ、推進役をしていただける組織をつくっていただきたいというのをどこかに盛り込む必要が私はあると思うんです。

委員長（西村慎次郎君）　一応ね……。

副委員長（宮地俊則君）　どっか入っとる。

委員長（西村慎次郎君）　２４ページの（２）のタイトルがちょっと弱いんですけど、ここのまた教育委員会内に教育研究所を設置し、学校のＩＣＴ環境整備の研究やということを

書いてるんで。

副委員長（宮地俊則君）　　支援員とはちょっと違うから、支援員とはちょっと違う次元の話じゃと思うんで、これじゃまずスタートじゃねえかなと。

委員長（西村慎次郎君）　　頭に持ってきましょうか、この辺。

副委員長（宮地俊則君）　　それか別項目に。

委員長（西村慎次郎君）　　１にして、そういう体制づくりをして、要は環境整備計画というのをそこで整備した上で計画的な機器の導入を図っていく。そのためには、そういう支援員の体制も充実する必要があるし、今（３）はちょっとＩＣＴに関係ない部分ではあるんですけど、その他として。

副委員長（宮地俊則君）　　副委員長で先に先に言うて申しわけないんですけど、やはり議会だけで、例えばタブレットを導入してくださいと、１人１台タブレットを導入してくださいというだけでは、それを使いこなせる、また措辞が必要なんで、やはりそういった組織を設置してもらって、そこで出た意見というか、方向性、選択肢というものは市は言い方は悪いですけど、無視できないんじゃないかなと。それが、やはり当然予算も絡むでしょうし、どこまでいくかということ、それから現状に踏まえた一番的確な機器であるとか、そういうとこも選択権というのは持ってもらえるんじゃないかと思いますんで、要は本気にするためにはそれをまず設置して、井原市にどこまで要るかというものをじっくり研究してもらう。もちろん、タブレットを１人１台という具体的なものも盛り込んでいいとは思うんですけども。

委員（三輪順治君）　　副委員長の意見に賛成で、まず課題解決の方向性のこれは前文でもええんじゃけど、一応１番目の課題として戦略本部みたいなもの、教育分野の環境整備にかかわる基本戦略を練る、そしてフォローする、そしていろんな現場の疑問に答える、ソフトの対応を含めてうったてが、それがあれば後作戦が立てやすいですね。ぜひ、そうしてほしいと思います。

委員（山下憲雄君）　　ちょっとまたややこしい話ですけども、地域学というか、そういうことをやってるという先ほどの話ですけども、現実的に地元の人たちがそういうプログラムを現実に知ってるかどうかというと、私自身もその内容の深いことは知らないんですけども、私自身が先ほどから言いますように、地域で子供を育てていくということからしますと、地域文化あるいは歴史あるいは地域の産業、ジーンズジーンズというてもジーンズ工場を見たことない子はいっぱいおると思う。稲倉だ、あっちの人は見たことないと思うんです。そういうことを見せる教育とか、あるかどうか知りませんよ。そういったようなことをプログラム化する。これはもう心の教育として地元に帰りたいという気を起こすような点で、やっぱりプログラム化するというのは重要なことじゃないかと。文化というのは、例え

ば私はこっちへ来て、これぞ田舎のいいとこだと思ったのがお大師講というのやら、荒神講とか、それから神楽とか神社の祭りとかあるんですけども、私が来てからやめたというようなところもあるんです。見詰地区というとこがあるんですが、そこはもう私が来る直前に、ああ去年からもうのうなったんよとかというてやめていくんです。やっぱり子供たちは、そういうのを見て地域学を学び、講とは何ぞやと昔はこうだったんだ、大人が集まって何しよんのかというて自分の郷土愛とか、またやがて戻りたいとかという心の教育、情緒かどうかわかりませんが、そういう情操教育をするような部分というのはＩＣＴとかバーチャルクラスとかそういうようなことばっかりでいくと、こっちが片落ちするような気がしますので、こっちの分野の養成というのは何か言葉はちょっとわかりませんが、ちょっと課題として持ってほしいなと思います。

委員（三輪順治君）　　それを課題解決の方向性の今２行しか書いてないですけど、事務的にというちゃあ失礼だけど、ここにこういった課題、６に書いた課題を解決するためにはということで、ちょっと振ってもらえば今の山下委員おっしゃった点、それから副委員長がおっしゃった点、含めておっしゃって、これ絶対せえという意味じゃないんじゃけど、こういうものがあるからこそ解決が具体的に見やすくなるよという話で、前段に書いていただければ、ちょっと日本語が長くなるけれども、終わりにということにも考えたんじゃけど、終わりにというたら、ちょっとおもろうないんで、課題解決の方向性の中に具体的に前文でばんと打ち込む、書き込む。それは必要じゃ思いますんで、両者のご意見を僕は入れたらいいと思います。

それともう一つ、統廃合の問題は、これは終わりにできりゃあ、以上の解決に向けての具体を練るに当たっては、どうしても避けて通れんということは一言僕は入れるべきだろう思います。それは、これからの行政投資の効率性にしても、子供たちの学力だけでない、生きる力を育むにしても、それは避けて通れないし、地域の方々の協力がなかったらこれはできないですから、地域の方にも問題を投げかけるという意味で、ちょっと教育委員会一歩先んじるけど、議会の問題意識としたらこんなもんじゃどうかなというのは私は思っとるんで、議長とはちょっと違いますけど、いや議長の言うことはわかるんじゃけど、わかるけど、僕は教育の環境ということになれば、どうしてもそこは触れておかにゃいけないんで、課題解決の方向性でなくて終わりにのほうへぜひ必要な検討であろうと、そのことを通して、どういう書きぶりかわからんけど、そういうふうに書いていただければ、私はもう今までのをようまとめていただいとるから、これ集約したら結構な中間報告になる。

副委員長（宮地俊則君）　　ごめんなさい、たびたびで。今の件なんですけども、これの１ページの（４）所管事務調査の目的とその背景というのがあります。ここに少子化の問題、これから人口減少になっていくと、その人口減少というのはただ生まれる子が少ないだけじ

ゃなくて、先ほど山下さん言われたように、高校、大学を卒業してから帰ってこないということが一つの人口減少の大きな要因だとも思うんです。ここに帰ってこれるような人材育成じゃないね、子供たちの育て方、さっき山下さんうまい言い方しましたね、仕掛けですか、帰ってくるような仕掛けですね。何かそういったもので、そういう教育をこの井原市でしていく必要があるんではないかということをここに組み込んだらいかがです。やはり、人口減少の歯どめをかけるというのは、Ｉターン、Ｕターン、Ｊターンの子供たちが帰ってくる、それも大きな要素であろうかと思います。いかがでしょうか。

委員（三輪順治君）　副委員長のご意見ももっともであります。もっともでありますが、この所管事務調査を選定した時期と内容が既にもう公表されて走っとるわけです。私たちは、それを起点にいろんな議論を重ねてきたけど、どうしても山や壁にぶち当たった、これは避けて通れんと。だから、目的は最初こうだったけれども、最後の第７章か、解決の方向性の中に当初そういう基本的なスタンスを持っとったけれども、いろんな調査をしてる中で、これはどうしてもどうのこうのという話を第７のところへ持っていかれたほうがスムーズなような気がしますね。

副委員長（宮地俊則君）　そうですね。７というか、６ですね。

委員長（西村慎次郎君）　７の頭で、６の課題に……。

副委員長（宮地俊則君）　課題に入れて、７に解決か。

委員（三輪順治君）　そういうのを入れたらわかりやすい。

委員長（西村慎次郎君）　誰がまとめるんで、ここから。

委員（三輪順治君）　そりゃ委員長よ。

副委員長（宮地俊則君）　もう言いたい放題言うて、あとはまとめて。

委員（佐藤　豊君）　井原に帰ってもらうということを先ほど山下委員も言われたように、子供のころからすり込むという井原の魅力というものをどう、何が魅力なんならと、何を訴えて子供たちに井原に愛着を持ってもらって、もう将来は必ず井原に帰ってくるぞという、その材料というか、それがなかなかアバウトなんです。明確じゃない。そこが一番の問題だと思うんです。だから、そこをどう発信していくか、訴えていくか、感じてもらうかというところを我々が持っていないと、ほいじゃあ何を伝えるんならと。地域文化というても、ほいじゃあこれは本当に井原に帰るための大きな地域文化だということを子供たちに自覚をさせたり、思わせたり、継承してやろうという思いを持たすようなことが井原に何があるのかなというところが今度はクエスチョンになってくる。それがわかれば、かなり前に進めると思うんですけど、それがなかなか井原の場合は全部が中途半端なところがあるという、そこら辺の変な意味での井原市の現状と、置かれてる地域性というのがあるんじゃないかというような気がするんです。今さっきからお話を聞きょうて、僕自身も最近市長と話し

したときも井原に帰ってもらうための取り組みをどうしたらいいじゃろうかということも今の大舌市長も悩みょうちゃったというんか、考えようちゃったというのも会話をしたときに実際に聞いて、そうだなと本当にそのために何を井原市の子供たちに伝えていけば井原に帰ってやろう、帰ろうという思いになるか、そこら辺がちょっと僕自身もアバウトな話になってしまったんですけど、そこら辺が一番の我々の課題でもあるんじゃないかなあというふうには感じてるんですよね、今。

副委員長（宮地俊則君）　ちょっとそういう話になったんで、本筋ずれた話になって申しわけないんですけど、今の話聞きますと、どうしてもひっかかるのが、山下委員の言われることもよくわかるんじゃけど、佐藤さんの言うこともわかるんじゃけど、子供たちで正直なところ、帰りたいと思ってる子、アンケートでもいっぱいいるんです、現実に実際にとって。だけど、帰れない。もうはっきり答えはしてるんです、働く場がないから。だから、ちょっとこれまたこの話になったら、方向がまた全然違う方向に行っちゃいますから、あれなんですけど、決して井原市の今の現状が、佐藤さんも言う何が井原市のいいとこで帰ってくる要素になるんなというけど、もう今十分に帰りたいと思ってる若い人たちはたくさんいます。ただ帰れない、働く場がないから。これが現実なんですよ。だから、これは余りこれを突き詰めていくと、これの全然違う話になってしまいますんで、私もこれ以上やめますけど、アンケートでははっきりしてます。

委員（三輪順治君）　ちょっとこの議論を収拾して。やっぱり、地域振興、産業支援、雇用の場、研究施設も大学もそうなんだけど、やっぱり飯食う、生きるためには経済活動が伴う。結婚する、子供つくる、お金かかる、そのために自分の設計、今度は教育から外れて学問して勉強して、そして社会へ出る。出るときに、なかったら一遍出てもろうて帰ってきてもらう。一遍出てみて、帰ってきてもらうためには相当の自分の力を出せる場がないといけない。それは別に井原じゃなくても、福山でも僕は倉敷でもええと思う。その議論をするときには、井原に絞らずに少し広域的な形で、これから何十年後を恐らくいろんな意味で、岡山、それから広島の間の備後、備中というようなイメージに僕は捉えとんです。だから、今谷間になっとる岡山と広島の１１０万と９０万か建っとるけど、今それを埋めたら多分この地域１００万おるんです、１００万近うおるんです、まとまったら。そういう発想をして、別に井原に住まいのうても井原で働きょうる。逆のパターンもある。福山に働く場があって、井原に住みょうる、ええ思う。でも、人口をふやすじゃ何じゃかんじゃというても、トータルとして全部減りょんじゃけえ、極端に言うたら、奪い合いになっとるんです。だから、そりゃもう余り細かい市町村の垣根のない、県の垣根のない、地域全体がそうなるように考えにゃいけんので、ええ議論なんじゃけど、ちょっと議論としては外さにゃあいけんと思う。

委員長（西村慎次郎君）　　少し描き添える程度にいたしますが、それを一つのうったてにして詳しく深掘りしていく形にはならんかなと思いますんで。

委員（三輪順治君）　　未来創造都市というて書かにゃいけん。

僕は一つだけ、ずうっと思うとるんが、もう議員になってからなんじゃけど、井原放送の活用なんです。これは議論があるとこじゃけど、井原放送は少なくとも井原市が資本の一部を出してる。正確に言うたら、資本金が８，０００万円近くあって、井原市が４００万円出す、４００万円。配当がいつも１割ぐらいあるから、４０万円ぐらいある。決算で見られとると思うけど、あるんですよ。井原放送が井原市といわば第三セクター的な構造をしとると、資本提携では。そうすると、井原放送を使って何が悪いかという、逆に言うと使わん手はねえだろと。そうすると、教育の現場で井原放送、地元のＣＡＴＶを使うことの優位性というか、これソフトを開発したら全国売れますよ。全国売れる、商売ができる。だから、僕は今有線放送が非常に県内でもたくさんあって乱立しとるけど、特色がある井原放送にするためには産業はもうちょっと難しいかもわからん。教育の分野でやっとるとこ、僕見たことないんです、このＣＡＴＶで。今、たちまち過疎地域における買い物支援とか、あるいは医療ネットワークなんかというのは別のネットで組みょうるけど、教育でテレビは皆どの家庭もある。すぐつけられる、チャンネルが。そこに先生の顔とかＡＬＴの顔が出たら、どんだけスマホを使わんでもようなるんじゃろうと。だから、できりゃあ難しい、世の中に例が余りないから、放送と通信を融合した形の新しい時代のＣＡＴＶというのは悪いけど、地域の持つ映像資源というか……。

委員（佐藤　豊君）　　教育ネットみたいな。

委員（三輪順治君）　　そうそう、そういう井原放送と書いちゃいけまあけど、わからんけど、協力してもらって、ぜひ委員長、これは僕は１０年ずうっとやってみたけど、今井原放送を時々間でつけるけども、あればあしょうるんよ、宣伝ばあ。できりゃあ、いろんな番組がお金払やああるけど、井原放送は井原市が資本を出しとるけえ、多少安く時間を区切っていただいて、例えば子供たちが帰る時間帯なんかに悪いけど今は商売しょうて、コマーシャルはちょっと２時間ぐらい、親が帰ってくる７時ごろまで、わからんですよ、ちょっとその時間にカリキュラムを利用して何か教育研究所でソフトつくってもろうてタイアップして、それを井原放送で流す。そしたら、チャンネルが多分ソフトのつくり方というか、キャパ、サーバーの機能によるけれど、ソフトのつくり方でそのお金は井原市が出したらいいんであって、だからぜひ１０年先考えたら、僕は絶対井原放送のお金をかけたネットワークは使えると思う。だからこそ１３億円、平成１７年ぐらいに終わっとんじゃけど、かけとんよ。今度、また美星と芳井かけようとしょうる。それは売りなんです。そのソフトは、もうほんま井原放送、有線放送が５００あったら、例えば１０万円で売っても５，０００万円です。違

うか、相当な額になる。いや、もう１０万円のソフトはないけどね。だから、ぜひこれから産業の支援、発展も含めて考えたら、井原放送を上手に能力を生かしていただく下地をこういう場でつくってあげて、井原市とともに教育関係で違う特色がある展開できると私は思います。これは今すぐ結論出ない。

委員長（西村慎次郎君）　全戸に井原放送がいってないという課題はクリアしていかにゃいけん。

委員（三輪順治君）　すぐつくれる、すぐつくれる。

委員（山下憲雄君）　それも私は井原放送と出資のときの規約があったり、４００万円出資したからというて、そんな強いことも言えんような状況なのかどうかもわかりませんけれども、一応民放ですので、コマーシャルをとって収益を得て大勢の人の視聴率を上げてというのが基本だと思いますので、そこら辺というのはここへすぐさま向こうとの調整が話がついてない中で載せるというのはどうかやから、一遍井原放送なり、状況をそういうことのアバウトでも誰かが聞いてしないと、いきなりその活用、通信と教育の連携みたいなことを上げたって、具体的に深掘りしていけるかと。それは調整が必要だと思いますし、向こうはちゃんとした組織があるわけですから。

副委員長（宮地俊則君）　大変よくわかるんですが、これでまとめて出そうとすると、この中に組み込むというのは私は相当無理があるような、わかりますよ。それから、最後のまとめか何かのときに、近い将来そういうことも考えられるというところで入れるか入れないか別にして、そういった話になろうかと思うんです。この中に大項目として、将来的な町としてというて入れますと、論点がすごくぼけてしまうような、またちょっと違った次元の井原市の将来に向けた課題の投げかけというとこになってくるんじゃないかと思う。いいアイデアであり、また内容だとは思いますけど、ここに入れるのには難しいかなと。

委員（佐藤　豊君）　今、三輪委員の、副委員長も言われたことで大体そういうふうに思うんですが、今三輪委員が言われた、本当にせっかく井原放送という大きな地域財産があるということの活用方法、またそれを教育に生かしていこうという活用方法ということでのアイデアは非常に視点としてはいい視点じゃないかというふうに思うんです。ですから、今回のことにはならんかもわかりませんけど、そういった視点も皆さん今回委員間討議の中で耳にしたことですんで、一つ一つそういったことが可能になる、将来的に可能になるならいいアイデアとして参考にさせていただくということでいいんじゃないかというふうに思うんですが。

委員（三輪順治君）　納得します。一言ちょっと言うと、高齢社会も考えにゃいけんのです。テレビをつけるおばあちゃん、おじいちゃんいっぱいおる。今、宣伝ばあ流れたら絶対見ないんです。だから、時代劇だとか何やかんやバラエティー見る。でも、そこに例えばあ

りましょう、何やかんや各地の、工夫次第です。それは、僕は生涯学習の充実の一環としても必要だから、何かちょっと書いていただいといて、中身はこれからいろいろしていくとして、もうこのメディアをせっかく今まで何十億円もかけて投資した意味が私はないと思うんで、私実ははっきり言って、以前僕がテレコムという会社におったんです、何年か前に。そのときに、市の幹部の一人が来て、おい第三セクターつくるのはどうすりゃええかと、井原放送もあったし、井原鉄道もあったんじゃけど、井原放送は有線ビジョンで聞いとった。結局、ああいう形になったんじゃけど、多分あのときに井原市がかなり首突っ込んで井原放送とやっとったら、今と展開違うと思う。彼はさめた目でやっちゃったから、故人は非常に尊重すべきなんだけど、僕はある意味で彼の思いがあったから、井原市の、そりゃ時間が２０年たっても実現してあげることが私はいいと思うんで、今目に見えんとこから多分言ようるかわからんけど、僕はそう思います。だから、何かの形でちょっと書いていただいて、よろしくお願いします。それをうったてて書くことはやめます。

委員長（西村慎次郎君）　　わかりました。

テレワークとかバーチャルクラスルームとか、その辺のキーワードは入れてないんですけど、その辺はちょっと具体的な……。

副委員長（宮地俊則君）　　そうなったら、それこそ３億円の整備が要るようです。

委員長（西村慎次郎君）　　ちょっと終わりの中にそういったことも今後研究して進めてほしいというような形で。

副委員長（宮地俊則君）　　そうじゃな。それは近い将来、これが行き渡るというか、利活用された暁には近い将来の夢のある展開として、こういうことも可能ではないだろうか、実現につながっていくんじゃないかと、先ほどの井原放送にしても、テレワークの話にしても。

委員長（西村慎次郎君）　　バーチャルという表現は別として、ちょっとこう少人数学校とを結ぶような、その辺の仕組みというのは考えてもいいんじゃねえかというのは入れてもいいですか。

委員（佐藤　豊君）　　それはいいと思います。

委員長（西村慎次郎君）　　それ以外、何かもし漏らしてるようなものがあれば言ってください。もう後書きにちょろっと入れるか、解決策として、よろしいですか。

委員（三輪順治君）　　初めには書いてねえんかな。何か提言の初め、何か市長において実現されたいというようなことをどこに書く。ぜひ当委員会の意を酌んで、実現に向けて鋭意取り組んでもらいたいというのはどこかに書く。あります。

委員長（西村慎次郎君）　　今、これ報告書として今やってきたことをまとめとんで、これをベースに提言書という形に変えていくんかなと思よんですけど。

副委員長（宮地俊則君）　　その辺はまだまだ何遍も。

委員（山下憲雄君）　　前回も説明がありましたので。

委員（三輪順治君）　　いや、でも中間報告せにゃあいけん。

委員長（西村慎次郎君）　　中間報告、だからどのタイミングでやっていくかというのはあるんですけど、１２月の議会中、全協で提言書は一度素案を提出して、全協でご意見をいただかないといけないですね、提言書になると。だから、今後のスケジュールになってくるんですが、今お伺いしたご意見を１２月の定例会の初日の委員会のときに盛り込んだものを見ていただいて、定例会中の委員会で提言書を協議して、最終日の全協で見てもらうという流れでいいんですか。難しい。素案を出すという、事務局。

議会事務局次長（藤原靖和君）　　１２月３日の前は……。

委員長（西村慎次郎君）　　なくてええかな。もう一回する。

委員（三輪順治君）　　いや、せにゃあいけん。

委員長（西村慎次郎君）　　もう一回します。

議会事務局次長（藤原靖和君）　　それはもう、絶対に。

委員（三輪順治君）　　絶対せにゃいけん。

副委員長（宮地俊則君）　　それはこのメンバーじゃろ。

委員（三輪順治君）　　このメンバー。

副委員長（宮地俊則君）　　このメンバーですね。そりゃ誰がまとめるん。みんな笑うてごまかしょうたら。

委員（三輪順治君）　　２９ぐらいあいてねえん、２９か３０ぐれえ。

委員長（西村慎次郎君）　　次回の日程を話しょうるんですね。

副委員長（宮地俊則君）　　もうその話になっとん。

委員長（西村慎次郎君）　　定例会前にもう一度するという方向でよろしいです。

〈異議なし〉

副委員長（宮地俊則君）　　２１、２２はだめよ、清掃施設の組合議会がある。

委員長（西村慎次郎君）　　来週はやめましょう。再来週……。

副委員長（宮地俊則君）　　月曜が議会説明。

委員長（西村慎次郎君）　　２６、２７はだめでしょう、一般質問の締め切りがあるけえ。２８、どうです。

委員（三輪順治君）　　いいですよ。

副委員長（宮地俊則君）　　午前中でしたら。

委員長（西村慎次郎君）　午前中でしたら。

副委員長（宮地俊則君）　うん、午後はちょっと。

委員長（西村慎次郎君）　２８日の１０時からよろしいです。次回、１１月２８日の水曜日の１０時から、報告書の内容のレビューとこれを受けての政策提言書素案の素案を出せるかなあ、出せんかなあという、まずはこれを完成させましょうというところと、素案の目次というか、素案をどういう章立てで出していくんかというのと、文言をこれをベースに変えていけばいいのかなあとは思ったりもすんじゃけど。

副委員長（宮地俊則君）　全協で最終的な承認をもらうのは、結局素案を出して、それからそこでして最終的にもう一回でしょう。そうなると、最初の時点では今言ったように、文言の初めと終わりとかまとめとか中まで全部完璧なもんじゃなくても、報告書の全部言うてみりゃあ、このまんまでいいですかぐらいまでしとかないと。

委員長（西村慎次郎君）　じゃ、ちょっと最後確認しますが、１１月２８日に１０時から今の報告書のまとめを確認いただくということで考えてると。このときに、素案の目次ぐらいとか、何か出せるものがあれば提言書の素案を１回目が出てくれば、まとまればそれを話をさせていただく。素案の検討については、１２月３日の初日の開会日の後の総務文教委員会と定例会中にある総務文教委員会でしっかり協議させてもらって、最終日の全協で皆さんに素案を説明してご意見いただくという流れでよろしいでしょうか。

副委員長（宮地俊則君）　この素案というのは……。

委員長（西村慎次郎君）　提言書。

副委員長（宮地俊則君）　提言書じゃね。

委員長（西村慎次郎君）　はい。

副委員長（宮地俊則君）　はい、了解。

委員長（西村慎次郎君）　だから、報告書としては次回の１１月２８日でまとめ上げれたらなあと思ってます。

委員（山下憲雄君）　中の１２月３日以降１７日までの間は、まだ今のところ未定。

委員長（西村慎次郎君）　定例会中の総務文教委員会は日にちは決まってますが、ちょっと……。

副委員長（宮地俊則君）　１３日。

議会事務局次長（藤原靖和君）　１３日１０時から。

副委員長（宮地俊則君）　仮日程。

委員（三輪順治君）　この日にもう一応固まるな。

委員長（西村慎次郎君）　１３日に固めないといけない。委員会としての素案は決定して、全協で素案を説明という流れ。

副委員長（宮地俊則君）　　これでいくと、１２月、年内に提言書ができ上がってしまうな。

委員長（西村慎次郎君）　　そうそう、でき上がれば理想だよねっていう。意見が全くなければ、そこでもう決定ですけど、予算が発表される前に提言書を持っていけるということにはなりますけどね。

副委員長（宮地俊則君）　　そういうことじゃな。１２月１７日か、もう査定済んどるな。

委員長（西村慎次郎君）　　以上で所管事務調査については終わります。

〈その他〉

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　閉会に当たり、議長、何かございましたらお願いします。

〈議長あいさつ〉

委員長（西村慎次郎君）　　以上で総務文教委員会を閉会いたします。

委員会行政視察報告書

平成３０年１１月１９日提出

井原市議会議長　西　田　久　志　　様

報告者　総務文教委員会

委員長　　西　村　慎次郎

副委員長　宮　地　俊　則

委　員　　妹　尾　文　彦

委　員　　山　下　憲　雄

委　員　　西　田　久　志

委　員　　三　輪　順　治

委　員　　佐　藤　　豊

期　　間	平成３０年１１月５日（月）
出張先及び 担当職員 職名・氏名	愛媛県西条市 　議会事務局　北須賀仁志局長、合田俊樹主任 　教育委員会　久嶋耕司教育ＣＩＯ補佐官、矢野祐樹ｽﾏｰﾄｽｸｰﾙ指導推進員
出張者氏名	西村慎次郎、宮地俊則、妹尾文彦、山下憲雄、西田久志、三輪順治 佐藤豊、藤原靖和（議会事務局）
調査項目	愛媛県西条市：教育のＩＣＴ化について

（概要）

別紙のとおり

（所感）

別紙のとおり

１．報告書は、視察・研修終了後１カ月以内に提出してください。
２．概要、所感については、別紙を添付してください。
３．所感には、１行目の右端に委員名を記載してください。

別紙

『教育のＩＣＴ化について』

愛媛県西条市教育委員会

【行政視察資料】

人と人とが繋がりあう、一歩先の社会のあるべき姿を目指して

～ＩＣＴを活用した地方創生へのチャレンジ～

西条市では、様々な分野にＩＣＴを活用した豊かなまちづくり「スマートシティ西条」を掲げており、特に学校教育でのＩＣＴ活用には力を入れ、教育クラウドを基盤とした授業と校務両方の情報化、ＩＣＴ支援員、教職員の負担軽減のためのテレワークシステム、バーチャルクラスルームなどを実施している。平成３０年１月３０日、全国ＩＣＴ教育首長協議会のモデルケースとしてふさわしいとして最優秀の「２０１８日本ＩＣＴ教育アワード」を受賞。

その具体的内容については、次のとおりである。

１．西条市の概要

■人　口　：　１１０，９２２人（平成３０年８月末現在）

■世帯数　：　５０，５１７世帯

■面　積　：　５０９．９８ｋ㎡

■小学校　：　２６校（うち１校休校）　５，７５６人

■中学校　：　１０校　２，６９０人

２．教育のＩＣＴ化の取り組みについて説明

以下、内容については、「行政視察資料」を参照。

（１）西条市全体のビジョン

（２）教育の情報化

・ＩＣＴ活用スケジュール　　・機器の配備状況

・電子黒板／デジタル教科書　　・教職員用グループウェア／校務支援システム

別紙

・ネットワーク整備／テレワークシステム

・ヘルプデスク／ＩＣＴ支援員　　・これまでの成果

（３）特徴的な取り組み

・バーチャルクラスルーム（遠隔合同授業）

・ＩＣＴを活用したスマートスクール実証事業

（４）私たちのこれから

・重要目標達成指数（ＫＧＩ）

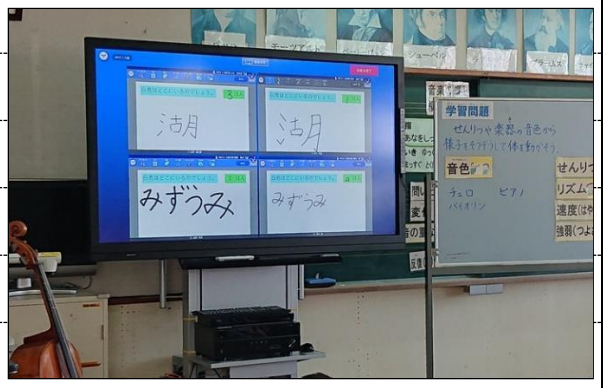
３．実際の授業風景を視察（西条市立神戸小学校）

（１）電子黒板／タブレット／デジタル教科書を活用した音楽の授業

曲を聴いて身体で表現

曲を聴いてどの動物をイメージするか？

グループで話したことをタブレットへ入力

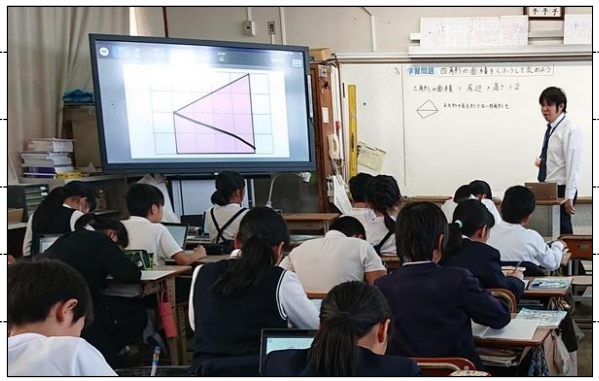


タブレットの内容を電子黒板に提示

※デジタル教科書、電子黒板、タブレットをうまく連携して、児童の集中力を維持させる授業をされていた。

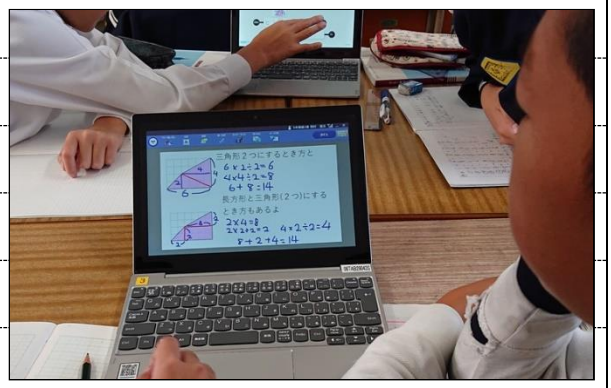
別紙

（２）電子黒板／タブレット／電子教科書を活用して四角形の面積の求め方を考える算数の授業



三角形の面積の求め方を使って四角形の面積を求める方法を考える

まずは、２人に１台あるタブレットを使って、面積の求め方を考えてみる



ヒントのほしいグループにヒントを送信

ヒントを見ながら再度考えてみる

４．質疑応答

〇ネットワーク整備について

・クラウド環境整備にどれくらいの費用がかかったか。⇒約３億円／５年間

〇テレワークシステムについて

・セキュリティの確保はどうしているか。

⇒メールアドレスを送信して、ワンタイムパスワード（８桁）が返信されてくる。

そのパスワードに、あらかじめ与えられているパスワード（４桁）をくっつけてクラウド環境へログインする。さらに、校務支援システムを利用するためには、ユーザーＩＤ／パスワードを入力し、ログインするという二要素認証を行っている。

別紙

・教職員が市外へ異動した際の対応はどうされているか。
⇒３月３１日２３：５９にシステムを使用できなくしている。
・テレワークシステムの利用者は何人いるか。
⇒希望者に利用許可をしている。７３０名中４４０名が利用している。
・利用端末は何を使用しているか。⇒個人のパソコン、スマートフォンを使用している。
○ヘルプデスクについて
・教職員の満足度はどうか。⇒満足・やや満足と回答した教職員が８７％。
※ヘルプデスクには、ＩＣＴ機器全般のヘルプデスクと校務支援システム（スズキ校務）の
ヘルプデスクの２種類のヘルプデスクがある。スズキ校務については満足されているが、
ＩＣＴ機器全般については、ネットワーク障害等による一次切り分けだけのため、解決に
時間がかかるため、あまり満足されていない。
・時間外の対応はどうしているか。
⇒ヘルプデスクは、１７：１５までの契約である。これ以降は校内でＩＣＴに詳しい先生へ
聞いている。
○ＩＣＴ支援について
※ベネッセへ業務委託している。
・１校あたり月何回訪問しているか。
⇒学校規模により異なるが、月２回～月８回である。
○バーチャルクラスルーム（遠隔合同授業）について
・環境整備のための費用はどれくらいか。⇒１教室あたり２００万円～２３０万円
・複式学級の解消にならなかった要因は何か。
⇒複式で学年別の授業ができればよいが、今の環境では難しい。先生も双方に１人ずつ必要
とされている。他市では、１教室の中で背中合わせにして、学年別に授業しているところ
もある。
※今後は、外部の団体等と接続して授業を受けることも検討していく。
・どの教科で活用しているか。
⇒やりやすいのは、国語・道徳。効果があるのは、算数・社会。

別紙

〇機器の配備状況について

・ＩＣＴ機器の整備にどれくらいの費用がかかっているか。

⇒普通教室は、１教室あたり７０万円～８０万円

特別教室は、１教室あたり６０万円～７０万円

〇その他について

・家庭教育に対するＩＣＴの活用状況はどうか。

⇒学習系クラウド環境があり、家から接続して勉強できる環境を構築している。

・人口減少に伴い、学校の統廃合を検討するという方向もあると思うが、バーチャルクラスルーム等ＩＣＴ活用の方向で統廃合しない選択をされた理由は何か。

⇒前々市長から決められている。学校はできる限り存続する方針。

以　上

（所感）

委員長　西村慎次郎

西条市は、今年、「２０１８日本ＩＣＴ教育アワード」を受賞されており、教育現場において、最先端をいっているなと感じました。井原市の教育環境の将来の方向性を見ることができたように思います。

ＩＣＴを活用した授業風景も観ることができ、我々の子どもの頃の授業とは全く違う勉強の仕方でしたが、子供たちが集中して授業に取り組めていて、ＩＣＴの力を感じました。

バーチャルクラスルームについては、実際の授業風景を観ることができませんでしたが、少人数小学校から中学校へ進学した際の中１ギャップには大変有効であったようなので、井原市も今後、少人数小学校がさらに増加してくると思われますので、研究を進めていってもよいかと思いました。また、テレワーク環境がすでに構築されており、半数以上の先生が活用されていました。

どの取り組みをみても、井原市の何倍もの先を進んでいるようでした。このような取り組みを実施するにあたり、国からの補助金をうまく活用されているところもありますし、財源が豊富であるところもあるなと感じました。

井原市の教育環境のあり方の検討を進めていく上で、大変参考になりました。

（所感）

委員　宮地俊則

現在、総務文教委員会が所管事務調査事項として『井原市の教育環境の充実』を調査研究しているところである。その根幹をなすのがこの『教育のＩＣＴ化』である。

教育現場でのＩＣＴ化は、その利活用によって教育の質を高め、子どもたちの学力を向上させることに繋がる、と言われている。が、なぜ、デジタル（ＩＣＴ）でなくてはいけないのか？我々世代がこれまで受けてきたアナログではなぜダメなのか？という疑念が、どこか心の隅にずっと引っかかっていた。

この度の西条市の視察でその疑念が払しょくされた思いがする。
そこでは音楽、算数の授業を実際に視察させていただいた。先生はもとより子どもたちも電子黒板・タブレット端末などを自分たちの道具のひとつとして、ごくごく当たり前のように使いこなし、活用しているのに驚きました。確かに今の子どもたちは早くからそうした機器に慣れ親しんでいるからであろう。そして、そこから新しい情報や感覚、知識をどんどん吸収している子供たちの姿に感動すら覚えました。

質疑の中で「ＩＣＴ機器の活用でその準備などでまだカリキュラムに遅れが出ることがあります。」と言われていたが、その懸念もみんなが機器に精通していくことで解決するものと思われる。

井原市においても一日も早くＩＣＴ化を推進していくべきであると感じた。その場合にも何歩も前を行く先進地のお蔭で環境整備や予算措置・機器選択などのソフト・ハード面での様々なハードルが格段に低くなっていることに感謝したい思いです。

本市でＩＣＴ化が進んでいく中にも昔ながらの手書きの良さ、じっくりと辞書を引くことも大切なことであることも忘れず、デジタルとアナログ、それぞれの良さをしっかりと使い分けながら、子どもたちの「学力向上」「生きる力」を育んで欲しいと思いました。

（所感）

委員　佐藤　豊

西条市は、ICT を活用した豊かなまちづくり「スマートシティー西条」を掲げた取り組みの中で、特に学校教育での ICT 化に対しては、平成２２年度より情報教育と校務の情報化に関する懇談会をスタートさせ、平成２４年より校務用コンピュータやグループウエアを導入し、計画的に校務支援システム、電子黒板、デジタル教科書等のシステムや ICT 機器を全小、中学校に配備するとともに、ICT 支援の充足にも取り組まれていた。特に教育現場を知っている ICT 支援員１１名を配置、学校規模によるが月に２回から８回、各学校に赴く体制は、ICT 化の推進とスムーズな ICT 教育の内容充実に寄与していると感じた。

また、ヘルプデスクによる教職員の問い合わせ窓口を設け、教職員の負担軽減に貢献する体制は参考となった。

上記の取り組みは効果があると感じた。また、教育現場でもスムーズな電子黒板の活用やタブレットの活用がなされ、児童・生徒の利用習熟も進んでいることを実感した視察であった。本市としても未来を見越した ICT 社会を考える時、教育現場の ICT 化のための環境整備は、今後、ますます拡充の必要性を感じる視察であった。

（所感）

委員　西田久志

７月豪雨被害の影響で、予定した西条市の視察研修が延期となり、１１月５日に実施できたことは、大変良かったと思う。

実際に、神戸小学校に出向き授業を参観できたことは、大変参考になった。

（デジタル教科書）の使用

まず、音楽の授業では、教師の負担がかなり軽減されているように思えた。必要なことが集約されており、デジタル教科書の整備は必要不可欠だと思う。

（ＩＴ支援員の充実）

現在１１人の支援員が３５校を分担して、月に２回、多い週には２回訪問し日々の授業・校務におけるＩＣＴサポートをしている。また、単なる使用補助に留まらず、ＩＣＴを活用した授業デザインの提案など、多岐に渡った活躍をしていることは教師にとって負担軽減につながることだと思う。

算数の授業では、２人に１台のタブレットを使用して三角形の面積の求め方について、可能性を模索していた。簡単に線が引け、簡単に消せることによって頭の中で瞬時に次の行動に移ることができ、生徒に学習意欲が湧くのではないかと思える。

（バーチャルクラスルーム）遠隔合同授業

これから先、少子化が進むと井原市においても複式授業が増加する。そこで、このバーチャルクラスルームは有効な手段であろうかと思う。特に、少人数校の小学校から中学校に進学する際に、心理や学問、文化的なギャップと、それによるショックを受ける生徒が、過去７０～８０％であったものが、現在ではでは３．６％になっており、遠隔合同授業の効果が表れており、素晴らしいことである。

井原市においても、ＩＣＴ教育推進で、子供たちの学びを可視化し、教員による学習指導や生徒指導の質の向上、学級・学校運営の改善等、学校教育の質の向上につながる。

全般に、多くの費用が掛かるようであり、また、克服しなければいけない問題も多々あり慎重にしなければいけないと思う。しかし、教育ＩＣＴ化は生徒たちの教育現場において有効な手段だと思う。今回の愛媛県西条市の視察研修では、井原市においても、教育現場に情報通信技術を活用するための整備を早期に導入すべきと思える。

（所感）

委員　三輪順治

～西条市の教育 ICT 化の活用について～

〈スマートシティ構想の一環としての取り組み〉

○　当市全体としての「スマートシティ（賢い、賢明なまちづくり）構想」の一環としての取り組みとして、教育分野での ICT への具体化がされていること自体が素晴らしいと感じた。（が、議会での取り組みは、進んでいないようだ。）

○　であるがゆえに、教育分野においては文部科学省等との連携で多角的な ICT の取り組みが容易となっていた。（モデル市としての補助金の活用を含め）

○　そこには、全国の市町村が抱えている少子高齢化への対応、とりわけ少人数規模での小中学教育継続へのチャレンジでもあり、まさに先駆的な取組であるかに見えたが、結果として思わしい成果が得られていないように思料する。

（今回の視察には、残念ながら含まれていなかった。）

○　ただし、今回、教室現場での電子黒板の活用やタブレットの活用実態を視察すると、これからの教育の大きな変革を想起させる。

〈今後の課題と思われる点〉

・教員の ICT 成熟度のアップと使いこなせない教員への対応

・教育委員会の現場サポート体制の確保・充実

（教育 ICT 専門員の確保とソフトメーカとの調整 ＝ カスタマイズ等）

・避けがたい小中学校の統廃合への検討

・遠隔教育（web 教育）の限界を直感

（人間教育、コミュニケーション、目と目が合う授業・・・）

・家庭教育との接点が、現段階では見えない

以上、主な所感を述べたが、教育の現場には常に「人間」としてのふれあいが前提であることを改めて痛感した。

特に子供たちに真の「生きる力」を身に着けさせるには、ICT やコンピュータの限界をも感じさせる視察であった。

（所感）

委員　山下憲雄

西条市では、ＩＣＴの活用による「スマートシティー西条」を全体ビジョンとして掲げて、基礎インフラ及び生活インフラ・サービスを効率的に管理・運営し、市民生活の質を向上させる構想がある。教育においても、国の示す「第３期教育振興基本計画」に従い、学力向上のためのＩＣＴの活用を推進している。

今回の視察では、神戸小学校の音楽と算数の授業を視察した。各教室には電子黒板（70 インチ）、タブレット（二人で１台）を使用しての授業では、先生のほかにＩＣＴ支援員（市内在住）が配置され、操作機器のトラブルにも適宜対応できる状況であった。先生が黒板にチョークで書くこれまでの時代とは比較にならない授業風景である。

また教員用のグループウェアも整備されており、会議の時間短縮、ペーパレスによる会議、学校間のデータのやり取りも実現している。

このように、西条市はＩＣＴ活用のトップランナーとして「人と人がつながり合う、一歩先の社会のあるべき姿を目指して」積極的な地方創生への挑戦をしている。

少子高齢化の中で、持続可能な成長路線を実現しようとする井原市の方向性に異論は全くない。本市の今後の児童・生徒数の減少の推移は、ほぼ想定できるが、現在の小学校１３校、中学校５校という学校数が、今後も維持可能かどうかの検討も行った上で、明確な方向性を示すことが必要であろう。子供たちの未来社会に向けた教育環境を整備するのは大人の責任である。児童・生徒数が減少する中で、ＩＣＴを活用した小中学校の持続可能な運営管理ビジョンを検討する体制づくりが望まれる。ＩＣＴ機器購入や環境整備には数億円が必要とされるであろう。

本市へのＩＣＴ導入にあたっては、こうした先行事例を参考に、地域社会、教育委員会、ＰＴＡなどとの協議のための組織化が急務といえる。いずれにしても、少子化を克服するための教育ビジョンの策定には子供の健全な成長視点に立った判断が重要なことである。

（所感）

委員　妹尾文彦

まずは、電子黒板とタブレットを利用した授業の現場を実際に見学できたことは大変良かった。

音楽の授業では、児童たちに電子黒板を見せながら授業を行い、生徒もよく集中して話を聞いていた。すべての授業内容を、電子黒板を利用して行っており、実際に先生が文字を前に書くことは１回もなかった。授業内容がそれで大丈夫なようにまとめられており、よく研究された授業を行っていた。また、先生の質問に対して、児童がタブレットに書き込んで、それらが電子黒板に一斉に表示されるのもよいと感じた。

算数の授業では、面積の計算の仕方を工夫するのにどのように考えたらよいかを、タブレットに問題を直接配信し、みんなで話し合って考えるという、「主体的・対話的で深い学び」の実践がなされていた。また、タブレットから送られてくる解答を直接映し出させることができるようで、他人の意見もすぐに見ることができ、効率よく授業が行われるようである。

このたびの視察で、ICT 環境でのタブレットを活用した教育現場をイメージすることができたので、今後の参考にしたい。

次に、自分の学校と他の学校の教室をモニターとスクリーンでつなぎ、まるで一緒に授業をしているかのように授業を行うバーチャルクラスルームというものも参考になった。

少子化による生徒数減少によって発生する少人数クラスの課題を、このバーチャルクラスルームは解消する手段になるのではないかと感じた。この試みによって児童たちは、「自分たちだけでは出てこないような意見が聞くことができた」とか、「自分たちだけのクラスの授業よりやりがいや満足度があった」など、多人数ならではの成果を感じているようである。また、教師らの評価では、クラスの学習規律、コミュニケーションスキル、表現力などが高まったと感じられているようである。

複式学級の解消という点では解決できなかったことなど、まだ課題は多くあるようであるが、試行錯誤をしながら活用していくことで、更なる効果を得られるのではないかと思う。

次に、校務支援システムと学習系システムをつなげて生徒の日常を分析するというスマートスクール実証事業というものも興味を引いた。

学校ごとの活動状況を可視化し、事業の成果をエビデンスとして教育施策へ反映するという「自治体カルテ」。ICT 活用を通じた児童生徒の意識変容を可視化し、エビデンスに基づく学級経営につなげる「クラスカルテ」。学習系システムの学習履歴と校務データを一元的に管理し、エビデンスに基づく個別生徒指導につなげる「児童生徒カルテ」。指導事例の蓄積・共有を行うことで、指導ノウハウの伝承を実現する「指導履歴 DB」という４つの取り組みがある。

特に今後、AI が発達すると、生徒一人ひとりにあった指導を提供することが可能になると

考えられるので、これらの取り組みは今のうちから研究していくことが必要になるのではないかと思う。また、教師の指導についてもデータの蓄積により、より良い授業が均一的に供給できるようになるのではないかと期待できる。

　このたびの視察で、大いに参考になることが多数あったので、今後の政策提言に向けて参考としていきたい。